

「日本酒で乾杯推進会議・奈良大会」開く



“日本文化のふるさと”から「日本酒で乾杯！」のメッセージを発信



日本酒で乾杯推進会議の奈良大会が10月16日の午後、「酒の始まり～奈良からのメッセージ」をテーマに、若草山の麓、奈良県新公会堂で開催されました（主催＝日本酒造組合中央会／主管＝奈良県酒造組合）。同会議の地方大会が開催されるのは今回が5回目、当日は、およそ230人の参加者が3部構成の多彩なプログラムを堪能。平城遷都1300年に沸く日本文化のふるさと・大和の空に、「日本酒で乾杯」の声が響き渡る一日となりました。



第3部 レセプションパーティーでの乾杯風景。発声は荒井正吾奈良県知事(上の写真)



絶好のロケーションの中、乾杯運動の発展と遷都1300年を祝賀

古代日本の黎明期から勃興期にかけて政治、文化の中心を担った古都・奈良。日本文化そして日本の酒文化を育んだ地として、奈良こそは乾杯運動の舞台に最もふさわしい場所のひとつといえます。会場となった奈良新公会堂も、能楽ホールをメインとするその端正な佇まいと、周囲に広がる奈良公園の眺めとが相俟って、まさしく日本文化を象徴するような美しさ。



奈良新公会堂

こうした絶好のロケーションの中で繰り広げられた今

大会には、主管団体として1年がかりで準備を進めてきた奈良県酒造組合関係者に加えて、日本酒で乾杯推進会議の会員や一般市民、県内各界から招かれた来賓など総勢230人が結集。爽やかに晴れわたった秋空の下、第1部「パネルディスカッション」(15:00～16:10)、第2部「狂言鑑賞」(16:25～17:00)、第3部「レセプションパーティー」(17:15～19:30)という多彩なプログラムを楽しみながら、乾杯運動の発展と遷都1300年の節目を祝い合いました。



会場入口



誇りをもって「日本酒で乾杯」を次世代に-神崎宣武氏が基調講演

能楽ホールで行われた第1部のパネルディスカッションでは、討論に先立って日本酒で乾杯推進会議100人委員会の石毛直道代表(国立民族学博物館名誉教授)が開会の挨拶。



石毛代表

「日本最古の神社でお酒の神様でもある大神神社がある奈良県は、日本酒と深い縁で結ばれている。中世の奈良酒、僧房酒(荘園で取れた米から僧侶が醸造した酒)は、南都諸白、三段仕込みといった今日につながるさまざまな新技術を生み出し、日本の酒造りに大きな改革をもたらした」と指摘した上で、「その奈良の都において、年に一度の地方大会を開催する意味はまことに大きいと言わねばならない」と、今大会の意義を強調しました。

続いて、基調講演を行った100人委員会の神崎宣武氏(民俗学者)は、

「『この御酒(みき)は わが御酒ならず 倭(やまと)なす 大物主の醸(か)みし御酒 いくひさ いくひさ』と古歌にもあるように、お酒は神様の依り代であり、

そのお酒を神前からおろして皆でいただく直会は、神様のお陰を蒙る礼講として、無礼講の前に行われた」と述べ、「神に供え、神と共に飲むという日本酒文化の意味を見つめ直し、日本酒で乾杯することの大切さを、誇りをもって次世代に伝えていきたい」と訴えました。



神崎氏

🍷 「乾杯運動は日本人の生き方を見直す突破口」パネル討論も充実

パネルディスカッションでは、佛教大学教授の高田公理氏を司会役に、奈良県経営者協会会長で橿南都銀行頭取の植野康夫氏、全農および JA ならけん会長の永田正利氏、三輪明神大神



左から司会の高田教授と、植野、鈴木、永田、西村のパネラー4氏

神社宮司の鈴木寛治氏、日本酒で乾杯推進会議の西村委員長の4氏が、奈良における酒造りの歴史と現状などをめぐって充実したやり取りを展開。

まず鈴木氏が、魏志倭人伝や古事記などの古書に見える記述から、日本人と酒との関わりの深さ、酒の神性、伝統性などを指摘したのを皮切りに、奈良県産の酒造好適米「露葉風（ツユハカゼ）」など県内の酒米づくりの現状を報告した永田氏、日本酒の低迷傾向に対して「奈良の酒の品質の高さを消費者にしっかり

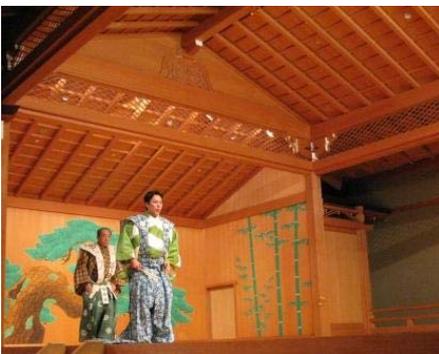
PR し、新商品開発や輸出に力を入れること」などを指摘した植野氏、日本酒で乾杯運動の目的を再確認した上で「乾杯するなら日本の酒でないと神様は機嫌を悪くする。奈良の皆さん乾杯はぜひ日本酒で」と訴えた西村委員長の発言などが続いたほか、途中には、来賓として出席していた菩提山正暦寺の大原弘信住職が、「僧坊酒」の歴史や、正暦寺～興福寺～奈良町へと寺の酒造技術が広まった経緯などを説明する場面も。

最後は、高田氏が「最近日本の政治経済は振るわないが、日本酒文化のぶ厚さはまさしく一流。この地点からスタートして、もう一度日本人の生き方を考える必要があるのではないか。日本酒で乾杯運動は、その突破口となり得る」と述べて討論を締めくくりました。



大原住職

🍷 「狂言鑑賞」でリラックスのひと時。酒が巻き起こす大らかな笑いの世界に浸る



太郎冠者(シテ)は千五郎氏(後ろ)

パネル討論の熱気から一転、第2部の「狂言鑑賞」では、大蔵流狂言（中世期、現在の奈良県を中心に活躍した大和猿楽系の狂言を伝える唯一の流派）の13世茂山千五郎氏と茂山千三郎氏による舞台「寝音曲（ねおんぎょく）」でリラックスのひと時。

「寝音曲」は、狂言の中では難曲として知られる演目で、太郎冠者（千五郎氏）が上手に謡うのを偶然耳にして、自分の前でも謡わせようとする主人（千三郎氏）、たびたび所望されるようになっては困ると、酒を飲まなければ謡えない、妻の膝枕でなければ謡えないといった苦しい嘘で逃げようとする太郎

冠者が滑稽なやり取りを繰り広げるといのが大筋。

中でも、何とかして謡を聞きたい主人が太郎冠者に大杯で酒を飲ませる場面、主人の膝枕で謡いはじめた太郎冠者が、寝ていると声が出るのに起きると声が出ないふりをする場面、果ては興に乗った太郎冠者が謡いながら舞い始めてしまう場面などは、酒と芸能という視点からも興味津々の見どころ。会場からは太郎冠者が滑稽なふるまいを見せるたびに笑い声の波が起こり、結局は嘘がばれて逃げる冠者を追いかけて主人が揚幕の奥に下がるまで、観客は酒が巻き起こす大らかな狂言の世界に快く浸っていました。



主人に酒を飲まされた太郎冠者は、酩酊の果てに興に乗って舞いはじめる

🍷 「日本酒の本場・奈良での開催に感謝」レセプションパーティーで荒井知事が挨拶

奈良大会の「レセプションパーティー」は、2階のホールに会場を移して午後5時15分からスタート。

はじめに主催者挨拶を行った辰馬会長は、「最近では日本の文化に愛着と安らぎを感じるという若者が増えているが、日本酒を知り、日本酒で乾杯することでそんな日本人のDNAを目覚めさせようというのが乾杯運動の本質。その地方大会を奈良で開催できたことは大変喜ばしく、準備と運営に当った県組関係者に厚くお礼を申し上げたい。



パーティーの様様(上の写真は主催者を行う辰馬会長)



大和のうま酒を楽しむ荒井知事

今宵は奈良のお酒と食文化を楽しみ、みんな奈良漬になって帰りましょう！」とユーモアまじりの言葉で、会場をなごませました。

続いて、多忙な日程の合間を縫ってお祝いに駆けつけた荒井正吾奈良県知事が、「わが国が日本という国号で初めて世界史の中に登場したのは702年のこと。その当時の人々がどんなお酒を飲んでいたのかは知らないが、日本酒の本場・奈良でこのような大会を開催していただいたことに感謝したい」と述べたのに合わせて、参加者一同、赤膚焼のぐいのみを高々と掲げて、日本酒で乾杯！。

★ 松花堂弁当と大和のうま酒の饗宴

乾杯の後は、それぞれ所定のテーブルに着座した参加者が、奈良の名店「天平 青柳」の松花堂弁当を肴に、県内の蔵元が丹精込めて造った「大和のうま酒」を満喫。

会場の一面には、平城遷都 1300 年祭に合わせて発売された県組合初の統一ブランド「奈良うるはし」や、平成 21BY 全国新酒鑑評会の金賞受賞酒などを集めたコーナーも設けられ、おおぜいの参加者で賑わっていましたが、宴も半ばを過ぎて、遷都 1300 年記念のマスコットキャラクター「せんとくん」が登場すると、ケータイを手にした人や一緒に記念の 2 ショットを撮影しようとする人たちが押し寄せて、場内は俄然ヒートアップ。深まる秋の中で繰り上げられた饗宴は、喜多会長の中締め挨拶が終わるまで、澁刺とした雰囲気みなぎらせていました。



「奈良うるはし」コーナー



せんとくん登場。すごい人気

【会場で拾った参加者の声から一】

「日本酒のよさは情緒の深さと料理との相性。今日の懐石弁当もおいしかったけど、中でも驚いたのは口取に出された飛鳥の蘇白和え（吉野切葛やゆり根などを奈良特産の乳製品・蘇で合えたもの）。日本酒との相性が素晴らしくて、お代わりしたいくらい」（40 代女性）

「遷都 1300 年と日本酒は、どちらも私たち奈良県人の誇り。奈良のお酒が全国で広く飲まれるように、もっともっと PR してほしい」（40 代男性）

「奈良の女は奈良のお酒で決まり、と思ってたけど、パネル討論での僧房酒の話などは初めて聞くことばかり。とても面白かった。カンパイは絶対日本酒でやります」（20 代女性）



好評の松花堂弁当



元 気 いっぱい、日 本 酒 で カ ン パ イ ！

◆ 心がけたのは“奈良らしさ”を出すこと（奈良県酒造組合 喜多一嘉会長談）

今大会を企画する際に最も心がけたのは、とにかく“奈良らしさ”を出そうということでした。その理由は、参加者の皆さんに奈良の文化と日本酒、そして奈良の味覚を楽しんでもらって、もう一度日本酒の歴史の厚みを思い起こしてもらいたいと考えたからです。幸い、全国各地から日本酒で乾杯推進会議の一般会員の方々も駆けつけていただきましたし、県内からも荒井知事をはじめ錚々たるメンバーにご参加いただくことができ、多くの方々から乾杯運動を応援してもらっていることを心強く感じました。「我々酒造家は、長い歴史と文化に育まれた日本酒を醸造していることに」に誇りを持って世界に飛躍していかなければならないと痛感しています。



挨拶する喜多会長